認知症とともに生きる
家族の物語

● 第12回 ●
（最終回）

誰もが認知症になる時代

～「本人の視点」に立って理解できた義父との日々～

NPO法人ハート・リング運動専務理事
早田　雅美

昨年11月、東京都板橋区にお住いの横山久美子さん（仮名54歳）は、義父の豊さんを亡くしました（享年74歳）。

認知症になった豊さんの晩年の2年間に、自分が深くかかわることになるとは思いもしなかったと久美子さんは述懐しています。それまで夫真一さん（52歳・元システムエンジニア）の実家を訪問することはせいぜい年に1回程度で、豊さんとも4歳違いの義兄隆史さんともそれほど深い関係ではなかったそうです。

夫が白血病に罹患

久美子さんは東京都内在住で、以前は航空会社の地上職で多忙な仕事をしていました。明け方には家を出る日もあって、真一さんともすれ違いの生活が長かったといいます。夫婦には子どもはいません。久美子さんも真一さんも同じ石川県の出身でした。久美子さんの実家は金沢市内の川沿いの静かな住宅地にあり、亡き父は元教師。一方、真一さんの生家は、金沢市からは車で1時間ほど郊外の田園地帯にあり、父の豊さんは元市の職員、隆史さんは同じ敷地内ですが、豊さんとは別棟に住んでいました。

豊さんの先祖は江戸時代加賀藩からその地域の管理を任されていた庄屋のような豪農で、先代が事業に成功したこともあって大きな蔵が2棟もある資産家だそうです。

2013（平成25）年、真一さんは白血病が原因で休職。久美子さんは夫の健康管理と航空会社の仕事の両立は無理だと考えて、時間どおりに仕事をおえられる事務職に転換、休日には得意な英語を活かして英会話スクールのアルバイトもはじめました。

義理の父に異変!?

ちょうどその頃、義父の豊さんが、毎日「うつ病」のようにふさぎ込んだ状態になっていて、精神科の医師から抗うつ薬を処方されている…と連絡がありました。市の職員として仕事をしていた頃の豊さんは、職場の周囲を盛り上げるような明るい性格で、友人も決して少なくないほうだったといいます。

2011（平成23）年に豊さんは妻の芳江さんを亡くし、その頃から縁側で、ボーっとしていることが多くなったそうです。先立った芳江さんは豊さんを陰で支えるタイプの人で、頼り切っていた芳江さんの死が豊さんに与えた悲しみは、ことのほか深いものだったようです。

豊さんの通院は、隆史さんやその妻が車で送っていましたが、豊さんのうつ的な様子に改善はみられず、次第に物忘れのような症状も現れはじめたといいます。25年ほどまえに建て替えた決して狭くはない母屋に豊さんは1人で寝起きをしていましたが、

隆史さんが初めに気がついた物忘れは、薬の飲み忘れや財布やカギの置き場所を忘れてしまうこと、何日もつづけて同じものを着ている（と思われる）ことだったといいます。

隆史さんや妻がいくら注意しても、豊さんは自分の物忘れを認めないことも多く、口論となり、そのことが原因で豊さんと隆史さん親子関係は次第に険悪になっていったようです。

隆史さんから「頭にきている」という電話をたびたびもらうようになった久美子さんでしたが、白血病の夫の世話や休みのない多忙な仕事の疲れで、なにもできずにただ隆史さんに「がんばって」というのがせいぜいだったといいます。

やはり普通ではない義理の父

真一さんの病状も安定していたことから2017（平成29）年の年末年始を久美子さん、真一さんは真一さんの実家で過ごしました。豊さん独りで暮らしている母屋で1週間を過ごしました。電話での声は聞いていていたものの、久しぶりにあう豊さんは「急に歳とってかなりやせた」という印象で、笑顔がなくいつも険しい表情だったといいます。

久美子さん、真一さん夫妻、豊さん、隆史さん家族でテレビをみながら食事することもひさしぶりのことでしたが、談笑の時間は長くはつづきませんでした。原因は、隆史さんの妻が腕によりをかけて用意した料理を豊さんが床に落としたり、こぼしたり、しまいに「口にあわない」といいだしたことでした。豊さんを隆史さんが「ボケ！」と何回も大きな声で叱責します。

真一さんと久美子さんがとりなして、どうにかその場をおさめました。

認知症を学ぶ

久美子さんは、たまたま認知症・軽度認知障害の医師木之下徹（きのしたとおる）氏による家庭雑誌の特集号（※）を読んだことがあり、認知症について理解が進んでいたことから、この1週間にみる豊さんの様子からおそらく「認知症」ではないかと思ったといいます。

そのことを隆史さん夫妻に伝えたところ、「その（認知症）薬は出ているが全然効かない」「オヤジには、頭にきている」「自分たち夫婦のことが気に入らないみたいで、妻がつくった料理が気に入らないのか最近まったく口にもしない！」と豊さんの状態を受け入れられていない様子だったといいます。

隆史さん夫妻がいないところで、豊さんは、「また隆史に殴られる」といったといいます。それが事実かどうかはわかりませんでしたが、久美子さんは豊さんと隆史さん夫妻をこれ以上一緒にしてはいけないと思ったといいます。

東京に帰ってから、久美子さんは認知症専門医を訪ね、豊さんの状態を相談しました。医師は、「あくまでも一般論として…」と断ったうえで、豊さんはおそらく認知症でそれもかなり進んだ状態である確率が高いといいました。薬の管理も自分ではできていないだろうから、実際には服用できていない可能性もあるという話でした。

さらに、豊さんの食事のときの様子を説明すると、認知症に伴う障害によって、食事の仕方そのものを忘れることやお皿の柄を料理と間違えて箸（はし）でつついているような状況かもしれないとの意見をもらいました。久美子さんはその説明に「ものすごく納得した」といいます。

問題の小さな糸口を見つけたという気持ちで、その医師の「一般論」をすぐに隆史さんに伝えた久美子さんでしたが、逆に隆史さんからは「余計なことをするな」「これ以上恥をさらすな」といわれてしまいます。

豊さんの状況が、久美子さん、真一さん夫妻と、隆史さん夫妻の関係にまで影を落としてしまった瞬間でした。

父を引き取る

その半年後、大もめにもめた兄弟間の相談を経て、久美子さんと真一さんは、豊さんを兄のもとからいったん都内の自宅に引き取り、その2カ月後、まずは有料のケアハウスへ、その後できたばかりのグループホームに入所させることができました。

その間、認知症専門医による詳細な検査を受けて、豊さんにはアルツハイマー型認知症の診断名がつき、いくつかの療法も開始されました。真一さんの病状も安定し、フルタイムではないものの仕事に復帰できたことから、久美子さんは週に3日は在宅でもできる仕事にかわりました。

豊さんを兄のもとから引き取るとき、今でも久美子さんたちの心にひっかかる兄の悲しい言葉があったといいます。「オヤジを引き取って、勝手な遺書でも書かせようというわけではないだろうな」。豊さんと隆史さんの関係を案じて決断したことなのに…。

隆史さん夫妻にとってみれば、それまで長い間豊さんのために精一杯のことをしてきたことは事実であり、隆史さんがさまざまに不安な気持ちになってしまったことも、理解できないことではありません。

豊さんの入所したグループホームは、久美子さん、真一さんの家から徒歩でも20分あれば通える場所で、毎日久美子さんか真一さんのどちらかがホームに通い、一緒に昼食をとったり、暖かい日には裏の公園を散歩したりしたといいます。

初めは環境の変化で混乱も見られた豊さんでしたが、久美子さん、真一さんの努力の甲斐もあって、次第に落ち着きを取り戻したようです。

なにより、独り暮らしで着替えすらままならなかった豊さんに、専門のケアスタッフの素早い対応は豊さんにとって「大きな安心」だったらしいといいます。

グループホームの職員から、「豊さんは、久美子さんが来るのを毎日楽しみにしている」と聞くと、豊さんに食べさせるためのお弁当づくりにも力が入ります。

豊さんだけで食べると失敗もありますが、初めにすこし誰かが手伝ってあげれば、豊さんは自分の箸で上手に食事ができることもわかりました。

そのグループホームにはおとなしい雌犬のゴールデンレトリバーがいて、犬好きの豊さんは犬と一緒にいるといつもやさしい表情になって幸せそうだったといいます。

大切な時間

豊さんが亡くなる半年くらいまえから、久美子さんが様子を見にいっても、豊さんは「久美子さん」という名前が出てこなくなりました。雑誌などで認知症について理解を深めていた久美子さんは「そんなことでこちらが傷ついてはだめ」と思いました。名前はいえなくても、笑顔で豊さんに接していれば、同じように豊さんからは笑顔のお返しがもらえます。

豊さんと過ごした時間は、久美子さんにとっては、健康なだけでは得られなかったかもしれない大切な時間だったといいます。

やがて自分たちも歳をとり、必ず老いはやってくるので、お互いをそれぞれの立場から見つめあう絆の大切さを教えられたということでした。

豊さんは、転倒して大腿骨頚部を骨折、治療入院中に敗血症を発症して他界しました。自分の足腰がからだを支えられないほど弱っている認識がない状態で、ケアスタッフが一瞬目を離したすきに車いすから1人で立ち上がろうとしたことが原因でした。

認知症は誰がなっても不思議のない時代といわれています。その際、認知症に対する正しい知識を持ち、「本人の立場、本人の視点」に立って考えることの大切さを、豊さんの認知症は教えてくれています。

……

12回連載でお届けした「認知症家族の物語」は、今回で終了します。

本連載のために貴重なお話をお聞かせくださいました家族の皆様に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

※久美子さんの推薦書籍

- 『クロワッサン特別編集　認知症を生きる』（マガジンハウス2017年・木之下徹著）
- 『認知症の人が「さっきも言ったでしょ」と言われて怒る理由 ～5000人を診てわかったほんとうの話～』（講談社2020年・木之下徹著）